

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

サラワクの開発の光と影——タイプ・マフムド氏がのこしたものの

大室元 (東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程)



クチン市内の川のほとりにたたずむサラワク州議会議事堂。タイプ政権末期の2009年に完工した新しい庁舎である。

サラワク州クチン国際空港から車で約 20 分。町のシンボルである猫の石像の近くに大型のショッピングモールがいくつか建っている。そのうちの 1 つにある書店を 2023 年の秋に訪れた。しかし、店の看板は伏せられ、入り口にはシャッターが下りていた。閉業していることを一目で察した。驚いたことに、建物内には同様の空き店舗がたくさんあり、廃虚モール (dead mall) と化しつつあった。

クチン市内で進行する大型モールの廃虚化は、ネット通販などの電子商取引 (EC) の普及はもちろん、4 年前にリニューアルされたプラザ・ムルデカ (Plaza Merdeka) の状況によって業界内での企業淘汰 (とうた) が起きたことが一因だと思われる。

しかし、州都の中心街にある商業施設が廃れた状態のまま取り残されていることの異様さを鑑みるに、ビジネス環境の変化だけでなく都市開発のあり方自体を巡る矛盾が生じている可能性がある。サラワク州は、利権争いや腐敗などのあしき慣習に囚われ、せっかくの豊かな資源を開発という公共の利益に活かすきれないジレンマに陥っているのではないかと。クチンの廃虚モール群にそうした「資源の呪い (resource curse)」の影を感じた。

そんなサラワク州は今年初めに 1 つの歴史的な節目を迎えた。1981 年から 2014 年までの 33 年間、州首相として開発をけん引したタイプ・マフムド氏が 2 月 21 日の早朝、首都クアラルンプール市内の病院で亡くなったのである。享年 87 歳だった。

タイプ氏は、オイルタウンとして有名なサラワク州

ミリで生まれた。オーストラリアのアデレード大学で法学を修めると、帰州して政界に入り、サラワクが独立した年である 1963 年に 27 歳の若さで初入閣した。閣僚ポストを歴任した後、叔父であるラーマン・ヤコブ氏に代わって州首相に就いたのは、第 1 次マハティール政権の発足と同じ 81 年だった。

タイプ氏の実績は実に多彩である。フタバガキ科 (メランティ) を中心とする南洋材の生産とその輸出、プランテーションによるアブラヤシの大量栽培、水力発電用のダム建設に代表されるメガプロジェクトをはじめ、さまざまな形で熱帯林の開発は多くの雇用を生んだ上に、外貨を獲得する原動力になった。主要都市の後背地に広がる内陸部農村地域においては道路や橋などの生活インフラが少しずつ拡充された。そして 92 年には、サラワクでは初の公立大学となるサラワク大学 (UNIMAS) がタイプ氏の連邦下院議員としての地元であるコタサマランに開校するなど、高等教育を通じた人材の育成というソフト面にも力が注がれた。いずれもタイプ氏が「近代サラワクの父」と称されるゆえんだ。

その一方で、タイプ氏による開発には光だけでなく影の側面があった。不透明な金の流れはその典型である。タイプ氏は数十億米ドルといわれる、州首相としての給与では到底稼ぐことができない莫大 (ばくだい) な富を築いたが、それについては事業権 (コンセッション) を開発業者に与える対価として大金が動いたとする見方が多い。ネット上では、ほろを開けたベントレーを自ら運転するタイプ氏の写真が出回るなど、ぜいたくな暮らしは有名だった。

公益性と私益性という光と影の 2 つの要素が絡み合う、タイプ氏による開発についての是非を問い、はっきりとした審判を下すことは困難だろう。いずれにしても、タイプ氏の亡き後の開発がより公益に資すること、すなわち一人一人のサラワキアンの厚生をより高める方向に進むことを切に願う。「サラワキアンのための開発」に期待したい。

< 筆者紹介 >

1992 年、東京都生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了。修士 (学術)。専門はマレーシア地域研究。サラワク州の地方政治や農村部におけるインフォーマルな政治に関心を持つ。